

天台と三論

『法華文句の成立に関する研究』刊行二十年に因んで――

(一)

隋代を代表する仏教者である智顛(五三八―五九七)と吉藏(五四九―六三三)には、次の六つの經典に対する共通した註疏がある。いまこれを図示すれば以下のようである。

- ① 維摩經 ② 法華經 ③ 金光明經 ④ 金剛般若經
- ⑤ 仁王般若經 ⑥ 觀無量壽經

智 顛

吉 藏

- ① 維摩經玄疏六卷 ① 淨名玄論八卷
- 維摩經文疏二十八卷 維摩經遊意一卷

- 維摩經義疏六卷
- 維摩經略疏六卷

- ② 法華玄義十卷
- 法華文句十卷

- ② 法華玄論十卷
- 法華義疏十二卷

- 法華遊意一卷
- 法華統略六卷

- ③ 金光明經玄義一卷
- 金光明經文句三卷

- ③ 金光明經疏一卷

奥 野 光 賢

- ④ 金剛般若經疏一卷 ④ 金剛般若疏四卷
- ⑤ 仁王般若經疏一卷 ⑤ 仁王般若經疏六卷
- ⑥ 觀無量壽經疏一卷 ⑥ 觀無量壽經義疏一卷

この中、天台三大部の一つとされる『法華文句』について平井俊榮博士が『法華文句の成立に関する研究』(春秋社)を著わされ、この書が大幅に吉藏の『法華玄論』や『法華義疏』に依拠して成立していることを細かな本文対照によって文献学的に厳密に論証されたのは一九八五年のことであった。つまり、同書が刊行されてから今年(二〇〇五年)でちょうど二十年の歳月が流れたことになる。個人的な想いを語って恐縮であるが、同書が刊行されたのは私が大学院博士課程一年在籍時のことであったから、同書刊行二十年というよりはむしろこの間の私自身の、そしてまたわが大学を取り巻く環境の変化にいいような感慨を覚えていた。

本稿は『法華文句の成立に関する研究』刊行二十年に因み、平井博士が提起された「天台と三論の交渉」に関するその後の研究動向を私なりにまとめておこうとするものである。多くの先行業績・関

連論文の見落しのあることを恐れるが、記して予めご寛恕を乞いたい。

(二)

さて、横超慧日博士は論文「慧遠と吉藏⁽²⁾」の冒頭において、「南北朝時代末期の仏教学界は、智顛・信行・慧遠・吉藏の四人をもって代表せしめることができる」といい、さらに続けて次のようにいつている。

この中で、智顛(五三八〜五九七)は解行の両面に比類なき新生面を開き、信行(五四〇〜五九四)は時機相應の教法を鼓吹して一世を動かした。そういう意味で智顛と信行には、当時の仏教界に対して鋭い批判があり、その信念は学解に偏したり儀礼に終始する世間一般の傾向に対して革命的であつたといつてよい。それに比べると、慧遠(五二三〜五九二)や吉藏(五四九〜六二三)には、なお時流に順応とまではいえぬにしてもかなり妥協的なものがその学風をなしているように思われる⁽³⁾。

つまり、ここで横超博士は智顛と吉藏の特徴を「革命的」と「妥協的」という言葉をもつて捉え、両者を対照的に論じているのであるが、平井博士はこの横超博士の言に従えば本来対蹠の立場にあるはずの智顛と吉藏には、こと經典註疏の撰述という観点から見ると本稿の冒頭に述べたような多くの共通性が看取されるとし、佐藤哲英博士の智顛の著作に対する文献学的研究⁽⁵⁾を指標としつつ、昭和十五年(一九八〇年)度文部省補助金(一般研究C)の交付を受けて「吉藏と智顛―三論・天台比較思想論的研究―」と題して両者の本格的比較研究に着手されたのであるという。そしてこれが『法華

文句の成立に関する研究』刊行の端緒になったことを同書「はしがき」は伝えている。

さらに、平井博士は同所において本書の結論ともいうべき見解を次のように披瀝している。

智顛と吉藏に共通する現存六部の經典註疏の本文を比較対照した結果、現存する智顛と吉藏に共通する經典註疏間の相互の依用関係は、ほとんど例外なく吉藏疏から智顛疏へという参照依用の跡が顕著に見られ、その逆は全く見られないことが判明したのである。このことは、智顛撰と伝えられる現存註疏の多くが、智顛の撰述であり得ないのは勿論、その講説を門人が筆録したものというのも多分に疑わしく、むしろ灌頂その他の門人によって、吉藏疏の成立以降に、これを参照し依用して書かれたことを証するものである。

本書はその題名からも明らかのように智顛と吉藏に共通する經典註疏の中、その依用関係がもつとも顕著である『法華文句』を中心に論じたものであり、私見によればそれ以外の註疏については『法華文句』の事例から帰納的に考えた場合、どのようなことがい得るのかということを示唆的に論じているところに特色があると思われる。

ところで、平井博士が本書の端緒となる比較研究に着手されたのとほぼ同じ頃、本学では池田魯參教授によって章安灌頂(五六一―六三二)の撰述になる『国清百録』の自主ゼミも行なわれていたという⁽⁷⁾。昭和五十二年(一九七七年)から開始されたというこの自主ゼミの成果は、のちに池田教授の手によって『国清百録の研究』(大蔵出版、一九八二年)としてまとめられることになるが、ほぼ同時

期に期せずして両者によって別個になされてきた研究は互いに互いを求め合うかのように以後大きな接点をもっていくことになる。なげなら、周知のように「国清百録」こそは智顛と吉蔵の文献交渉・思想交流を考える上での基礎資料になるものだからである。

(三)

大業三年（六〇七年）に成立したとされる「国清百録」巻第四には、吉蔵から智顛へ送ったとされる次のような書簡四通が収められている。

① 吉蔵法師書第一百二。凡三書。

② 吉蔵啓景。上至奉旨伏慰下情。薄熱不審尊体何如。願信後獲膳勝常。誨授無乃上損衆拜觀。未即伏增恋結願珍重。今遣智照還啓。不宣謹啓。

③ 吉蔵啓景。上至奉師慈旨不勝踊躍。久願伏膺甘露頂戴法橋。

吉蔵自願備訥不堪指授。但仏日將沈群生眼滅。若非大師弘忍何以剋興。伏願広布慈雲啓發蒙滯。吉蔵謹當竭愚奉稟誨誘。窮此形命遠至來劫。伏願大師密垂加授。夏亦竟即馳觀。今行遣智照諮問。謹啓。

④ 吉蔵啓景。上未至數日之間便爾感夢。又景上至已後仍復得夢。一一智照口述。景上尋婦。亦因委諮謹啓。（大正藏四六・八二二下）

⑤ 吉蔵法師請講法華經疏第一百二。

⑥ 兖州。会稽眞嘉祥寺吉蔵稽首和南。伏聞山号崔嵬。道安登而說法。峰名匡岫慧遠棲以安禪若茲嶺宏麗接漢連霞。溶壑飛流衝天灌日。赤城丹水仙宅隈区。仏隴香噀聖果福地。復經擅美孫賦

天台と三論（奥野）

称奇。智者棲憑二十餘載。禪慧門徒化流遐邇。昔同寿英彦纔解通經法。淨俊神正伝禪業。若非道參窮学德伴補处。豈能経論洞明定慧兼照。至如周日没。後孔丘命世。馬鳴化終龍樹繼後。如内外不墜信在人弘。光頭大乘開發秘教。千年之与五百夷復在於今日。南嶽寂聖天台明哲。昔三業住持。今二尊紹係。豈止灑甘露於震旦。亦当振法鼓於天竺。生知妙悟。魏晋以来典籍風謠。実無連類。釈迦教主童英發疑。盧舍法王善財訪道。敢縁前迹諦想崇誠。謹共禪衆一百餘僧。奉請智者大師演暢法華一部。此典衆聖之喉鍵。諸経之関鍵。伏願開仏見耀此重昏。示真実道朗茲玄夜。庶以三千国土來稟未聞。百劫後生奉遵大義。築場戒節析木將臨。搖落山莊玄黄均野。桂巖玉藥菊岸華采。弥切声聞之心。頗傷縁覺之抱。吉蔵仰謝前達。俯愧詢求。兢懼唯深。但増戰悚。謹請。開皇十七年（五九七年）八月二十一日。（同前・八二二上—八二二中）

すでに述べたように、従来はこの「国清百録」の記述をもつて、智顛と吉蔵の交流を考える一次資料としてきたのであるが、平井博士は「法華文句の成立に関する研究」に先立つ「吉蔵と智顛」經典註疏をめぐる諸問題⁽³⁾なる論文において、この「百録」の記述の歴史的信憑性について次のように疑問を提起している。

博士によれば、この四通の手紙の要点は以下のように要約されるが、そこには明らかな矛盾が指摘されるというのである。博士のいわれるところを聞いてみよう⁽⁹⁾（以下の引用文中の記号②③④および傍線は奥野による補い⑤以下同じ）。

① 吉蔵はつとに智顛の病氣を知つて、健康を気遣い、見舞いをしている。（第一書②③④）

② 古藏は衆に随つて智顛に見えたことはあるが、まだ身近に接したことはなかった。（同Ⅱ第一書Ⅱ㉞）

③ そこで、ぜひ教えを受けたいと懇願し、夏が終つたならば、智顛のところへ行つて会いたいといつた。（第二書Ⅱ㉟）

④ 智顛の使いが来る前後に、しきりに（智顛の）夢を見、このことを使いの者にも伝えた。（第三書Ⅱ㊱）

⑤ 禅衆一百余僧とともに、智顛を招じて『法華經』の講説を請うた。それは智顛示寂の三ヵ月前である。（第四書Ⅱ㊲）

この四通の手紙は、⑤の古藏が智顛に法華の講義を請うたという、この一点を強調し紹介しようとする意図の下に編集されたとする、きわめて首尾一貫している（結局は、智顛の『維摩經疏』の執筆と病氣のために、この件は果されなかった、というのが伝説である）。しかし、虚心に見れば、この四通の手紙には明らかな矛盾が指摘できる。智顛の病氣を以前から氣遣つていた古藏が、示寂のわずか三ヵ月前に、法華の講説のために智顛を招請するなどということがあり得たかという点である。しかもこの第四書には、智顛の健康状態については一言半句も触れられていないのである。

「示寂のわずか三ヵ月前に法華の講説のために智顛を招請するなどということがあり得たか」ということは、言ってみればこれは主観の判断にもとづく事柄であるから、正直のところこれだけの記述からではその内容の歴史的信憑性を疑うことは難しいと思われる。しかし、この『百録』の記事と『統高僧伝』『灌頂伝』に伝える関連する記事を照合させて次のように述べる博士の言は俄然説得力をもつてくる。すなわち、博士は「灌頂伝」を引いて次のようにい

われるのである。

◎道宣「統高僧伝」卷第十九「灌頂伝」開皇十一年。晋王作鎮揚州。陪從智者戻止刊溝。居禅衆寺。為法上將。日討幽求。俄隨智者。東旋止于台嶽。晚出称心精舍開講法華。跨朗篋基超於雲印。方集奔随負篋屯涌。有古藏法師。興皇入室。嘉祥結肆独擅浙東。聞称心道勝意之未許。求借義記尋閱淺深。乃知体解心醉有所從矣。因廢講散衆投足天台餐菓法華発誓弘演。至十七年智者現疾。瞻侍晚夕艱劬尽心。爰及滅度親承遺旨。乃奉留書并諸信物。哀泣跪授。（大正藏五〇・五四八中）

『国清百録』では衆に随つて拝観したことはあるが、身近に接したことはないといふ見舞いの辞を述べ（第一書Ⅱ㉞）、教えを懇願した手紙でも、夏が終わつたら馳せ参じてお会いしたいといつていた（第二書Ⅱ㉟）、古藏が、ここでは、智顛の侍者である灌頂からすでに『義記』（法華疏であろう）を求借し、深く悟るところがあつて自らの講説を廢し、大衆も散会して天台に投じたといつていたのである。「講を廢し、衆を散じて」智顛が病氣になつてからは「晩夕に瞻侍」している古藏が、どうして、禅衆一百余僧とともに講説のために智顛を招請（第四書Ⅱ㊲）することができるのか「国清百録」の書簡が真実なら「灌頂伝」は虚構であるし、後者が正しければ前者は偽である。この矛盾は、系統の違ひ異質の資料を照合したために生じたのではない。「国清百録」と、その編者である灌頂その人の「伝記」に伝えるところである。

このように「百録」の記事と『統高僧伝』『灌頂伝』の記事を照合させて、その記述の不整合性をつかれたのはまさに平井博士の卓見

であったといえよう。ただ一つだけここで私の意見をいえば、『百録』が灌頂の撰述であるのに対し、『統高僧伝』はいうまでも道宣(五九六―八六七)の筆になるものである。したがって、両者は正確にいえば「異質の資料」といえないことも事実ではあるまいか。とすれば、『百録』の記事を道宣が増幅したという可能性も完全には捨てきれないとも思われ、今後は道宣の『統高僧伝』全体の執筆姿勢といったものの分析を通しての再検討も必要であると思われるのである。

ところで、早くに島地大等博士もその著『天台教学史』の中で智顓と吉蔵との関係を論じ、次のように『国清百録』の記事に疑問を呈していたのである。長文に亘るが、関連する全文を引いてみよう。

天台智顓正統の門人に關して叙せんとするにあたって、まず吉蔵と智顓との關係いかんを一言する要あり。そもそも六朝時代末葉の仏教界にありて、斬然その頭角を現わせるものは慧遠・智顓・吉蔵の三大学匠にして、彼等三師は序でのごとくその年齢においてはまさに兄弟の間にあり。しかし而して慧遠と智顓との關係については、もしかの『観経疏』にして智顓の真撰なりとせば、もちろん、これら二師の間にはなんらかの交渉ありしならんとするも、しかもなお未だにわかに判定し難きところとなす。しからば智顓と吉蔵との關係いかん、けだし章安の『国清百録』卷四には吉蔵より智顓に寄せたる書信をあげたるの外、あるいはまた吉蔵が天台智顓に対して『法華経』の講説を請うるもの一通をも載せたり。しかもこれは後世天台の学者が、吉蔵をもつて智顓に交渉ありとなす根拠をなせり。すなわち古来の人おもえらく、吉蔵かつて智顓に『法華』の講を請いしも

天台と三論（奥野）

智顓これに應ぜず、のちに幸いにして章安に頼り『法華玄義』を得てひとたび巻を開くやたちまち感悟し、その旧疏を焚焼したりと。また『統紀』第十にいわく、禪師吉蔵は金陵の人なり。七歳興皇の朗法師によりて出家し大義を咨決す。のち會稽に遊び嘉祥寺に止まり、『法華』を講演し自ら章疏を著す。智者再び天台に帰るや、師禪衆百余人とともに疏を奉じ法華を講ぜんことを請うも赴かず。章安称心を弘通するにおよんで、よりに『法華玄義』を求め巻を發きて一覽し、すなわち感悟して旧疏を焚焼し深く前作を悔い、來りて章安に投じ觀法を咨受すと。しかれども今もし一步を退けて吉蔵・智顓両師の著作を比見するに、一部学者の称するがごとく吉蔵が天台智顓の門に投ぜりというは誤解なりと云わずんばならず。そもそも智顓と吉蔵とは本質的にその思想を異にするものあり、吉蔵一派の学者は龍樹の中觀論的思想を立脚とするものにして、空と実相とを同一意義に解し、中道は空を空するの語、無所得空の異名なりと釈せり。これ智顓の三諦説と明らかに碩異あるものにあらずや。のみならずまた同一『法華経』に対する文義の釈相も大いに異なりあるを見る。殊に大師智顓の法門中その特色と見るべきものは即ち觀心なり。もし吉蔵にして智顓の門に投ぜるものなる時は、少なくともこの思想のいくらかなりとも彼が著作において発見せざるべからず。しかもその事実は全くこれに反せり。(傍線部〓奥野)

つまり、ここで島地博士は、智顓の思想的特質は「觀心」にあるのであり、もし吉蔵が智顓に投じているのであれば、吉蔵の著作中にはいささかでも「觀心」に対する言及があつてしかるべきである

が、吉蔵の著作にはまったくそれが見られないから、吉蔵が智顛の門に投じたと見ることはできないと主張されていることがわかる。島地博士はここから平井博士のようにしからば智顛と吉蔵の文献交渉はいかんといいるところまで筆を進めることはなかったが、早い時期に上記のような主張をなされていたということはやはりここで改めて注意しておいてよいであろう。

さて、引用した島地博士の一文でも言及されているように、そしてこれはまた平井博士も鋭く指摘しているところなのであるが、問題の『百録』の記事は宋の咸淳五年（一二六九）に成立したとされる志磐の『仏祖統紀』巻第七「灌頂伝」および巻十一「吉蔵伝」にならるとさらに次のように増幅した書きぶりに変化していく。

④ 志磐『仏祖統紀』巻第七「灌頂伝」郡中有嘉祥吉蔵。先曾疏解法華。聞章安之道。廢講散衆投足請業。深悔前作之妄。（大正藏四九・一八七七）

⑤ 同巻第十一「吉蔵伝」

禪師吉蔵。金陵人。七歳依興皇朗法師出家。咨決大義。後遊会稽止嘉祥寺。講演法華自着章疏。智者再帰天台。師与禪衆百餘人奉疏請講法華不赴。暨章安弘法称心。因心法華玄義。發卷一覽。即便感悟。乃焚棄旧疏深悔前作。来投章安咨受觀法（同前）。

一〇二一上

しかし、その記事の信憑性や歴史的事実関係はともあれ、前述のような『百録』における智顛と吉蔵に関する記述は、上記の『仏祖統紀』を待つまでもなく中国・日本においては圧倒的影響力を持つて流布していくようになる。以下に私が確認している限りにおいて、この問題に言及した文献を掲げてみよう。

⑥ 湛然『法華文句記』巻三下

故知嘉祥身露妙化。義已灌神。旧章先行。理須委破。識此大旨。師資可成。準此一途。餘亦可了。亦如三種法輪。殊承承稟。大師稱為頓乳。其以根本為名。大師以三味為枝條。其亦以醍醐為歸本。（以下略）。本師所師旧章須改。若依旧立師資不成。伏膺之說摩施。頂戴之言奚寄。（大正藏三四・二二一三上・中）

⑦ 唐・道暹述『法華文句輔正記』巻第三

本師所師者涅槃五味判教元是本師所師之法既帰心於師先章須改也。嘉祥者寺名在会稽王義之捨宅所置。名吉蔵胡郷所生世称字海心口難伏之慧。口寫如流之辨。著述章疏領徒盛化大師初至陳都。有沙弥法盛造席數法師無对法盛時十七身小声大法師嘲曰你不摧声補体法盛心声。对曰法師何不削鼻項眸吉蔵良久咽更調曰。汝好好問阿闍梨好好為汝答法盛曰。野和上著在經文胡作闍梨出何典拠。吉蔵位謂曰尺水計無文波。法盛曰餘水雖不能沾於鯨鵠亦足淹於蟻蜂。吉蔵又問誰為汝師汝誰弟子。法盛曰宿王種覺天人衆中広説法華是我等師我是弟子講教乃捨山水納一領用奉大師。遂即伏膺請講法華。身為肉燈用登高座。後因借章安義記乃弥達淺深。体解口鉗身踊心醉。廢講散衆投足天台。凜凜法華。誓願弘讚頂戴永永。豈生異徹。（正統藏四五・五五右上一下）

〔日本撰述のもの〕

⑧ 最澄『法華秀句』巻上「仏説諸経校量勝五」

有人問曰。法相宗人。造法華贊盛弘法華。其疏記等數百卷。又三論宗人。造法華疏盛講法華。今天台法華宗。有何異釈勝於二宗耶。答若論異釈者。玄疏籤記四十卷。今指一隅令知三方。法相宗人以成唯識為尊主。屈法華義令帰唯識。雖贊法華経。還死

法華心。故湛然記云。唯識滅種死其心。当知。其義懸別。又三論宗人雖造法華疏。其義未究竟。是故。嘉祥大德。歸伏称心。案高僧傳第十九云。灌頂晚出称心精舍。開演法華。跨朗以籠基。超於雲印。方集奔隨。負篋書誦。有古藏法師。興皇入室。嘉祥結肆。獨擅浙東。聞称心道勝。意之未許。求借義記。尋閱淺深。乃知体解心醉有所從矣。因廢講散衆。投足天台。演法華。發誓弘演也。当知。雖有法華疏。不如天台釈。(伝全三・二五一—二)

① 最澄『法華秀句』卷下「普賢菩薩勸発勝十」

明知。玄贊之家。死法華心。掩法華眼。断法華命。割法華喉。誰有智者。不驚愕哉。不可畏哉。不可畏哉。無相之家。借義記。尋開淺深。投足天台。演法華。然公云。嘉祥身沾妙化。儀已灌神。旧章先行。理須委破。識此大旨。師資可成。準此一途。餘亦可了。乃至云。若依旧立。師資不成。伏膺之說靡施。戴之言奚寄。無相之家。改旧玄疏。歸仰天台其文不墜。何不信者哉。何不信者哉。(伝全三・二七八—二九)

② 法進『沙弥十戒并威儀經疏』

古藏鼻長而眼深也。古藏言。小師雖然如此。尺水亦不生大波。灌頂又言。尺水雖不沈鯨(音擊)足。得音淹其蟻(音樓)蟻(音擬)法師告云。小師莫漫多語。好作問頭。阿闍梨為答。沙弥報言。野干為和上。經有明文。未委胡作阿闍梨。有何典拠。古藏觀此。便手將如意打案一下。如意便折。灌頂調言。如意既折。義鋒亦摧。古藏告云。我如意折。取汝手裏者。灌頂高声拳如意。報云。百年之後。方当付囑。古藏見此奇詞。便下高座。問沙弥言。卿師事何人。灌頂報言。内供奉大德天台大師前者至此聽法。座主不肯与如意是也。法師聞此。倍自墮責。我等愚癡不識聖人。弟

子沙弥智慧尚爾。何況於本師。當時停講。共其灌頂奔往天台。遙見大師膝見大師膝行肘步。涕泗(音四)流泣。淚下如雨。其大師每日二時昇座人說法。古藏屈身猶如案椀。要令大師踏背上座。下亦如此。(日本大藏經)新版四〇卷、三〇三上—三〇四下、カッコ内は割注)

③ 円珍『諸家教相同異略集』

問。古人亦云。嘉祥受法天台。即為師資。身沾妙化。義已灌神。今此事实爾歟。答。実爾。此事具出国清白録並進僧都沙弥威儀經疏及妙樂法華記等也。(智証大師全集)卷中・五八五下)

④ 円珍『法華論記』卷第八末

復吉門徒曠。今本迹自立本迹。曾不及今家六種本迹中一重一双。汝未曾誑法華。如嗅鼻人馥旃檀。盲不見日。蛙不知海。不識仏化之始終。永迷本迹之理。汝尚如此。況餘黨乎。可憐可憐。汝本師吉燒却旧章。歸仰天台。伏膺頂戴。圓頓之旨。汝須共吉。先習我道。(智証大師全集)卷上、二六〇下)

⑤ 日蓮『秀句十勝鈔』「仏説諸經經较量勝五」

又三論宗の人、法華の「疏」を造ると雖も、其の義未だ究竟せず、是の故に嘉祥大徳は称心に帰伏す。「高僧傳」の第十九を案ずるに、灌頂晚に称心精舎を出でて法華を開講すること朗(法朗)龍(慧龍)を跨え、雲(法雲)印(僧印)に超えたり。方集奔隨篋を負ふて書誦す。古藏法師なるものあり、興皇の入室なり。嘉祥に肆を結び、独り擅にす。「義記」を求借し、尋で淺深を問す。乃ち知る、体解心醉の所従あることを。因て講を廢し衆を散じ、天台に投足し、法華を演稟し、發誓弘演せり。当に知るべし、法華の疏ありと雖も天台の釈に如かざることを。

『記』の三に云く、「嘉祥身妙化に沾ひ、義已に神に灌ぐ」〔文〕。又云く、「旧章須らく改むべし、若し旧立に依らば、師資成せず。伏膺の施設すこと靡く、頂戴の言筈ぞ寄せん」と。『輔』の三に云く、「嘉祥とは寺の名なり、公稽に在り、王羲之、宅を捨てて立つる所なり、吉蔵は胡卿の所生、世に覚海と称す。心に難伏の慧を包み、口に如流の辯を瀉ぐ。章疏を著述し、徒を領して化を盛んにす。大師〔吉〕、初めて陳の都に至る。沙弥法盛あり、席に造つて数数問ふ。法師〔吉〕、对ふること無し。法盛時に年十七、身小にして声大なり。法師〔吉〕、嘲りて曰く、儂ち那ぞ声を摧いて体を補はざるや。法盛声に应じて对へて曰く、法師何ぞ鼻を削りて眸を填めざる。吉蔵良久しく咽んで調を更めて曰く、汝好好闇梨に問へ、好好汝が為に答へん。法盛曰く、野干の和上は著に経文に在り、胡闇梨と作るに丈波無し。法盛曰く、余が水は鯨鵠を泛ぶること能はずと雖も、亦蟻蜂を淹すに足れり。吉蔵又問ふ、誰か汝が師たる、汝は誰が弟子ぞ。法盛曰く、宿王種覺天人衆の中に広く法華を説く、これ我等が師、我は是れ弟子なり。講散して山水納一領を捨て、用て大師に奉る。遂に即伏膺し、請して法華を講せしめ、身を肉磴となして用て高座に登せ、後章安の『義記』を借るに因て乃ち弥淺深に達し、体解け口紺み身踊り心酔ひ、講を廢し衆を散じ、天台に投足し法華を演稟し、弘演弥演べ頂戴永永までにはず。豈異轍を生ぜんや」と。『統高僧伝』十九に云く〔道宣撰〕、「晩に出て○誓を發して弘演す。十七年に至つて智者疾を現す。暁夕に瞻待し艱勛心を尽す。爰に滅度に及んで親しく遺旨を承る。乃

ち留書並びに諸の信物を奉じて哀泣跪授す。晋王乃ち五体を地に投じ、悲涙頂受して事實礼に遵ひ、情法親に教し。尋いで楊州の総督府司馬王弘をして、頂を送つて山に還す。智者の爲めに千僧齋を設け、国清寺を置く」〔昭和重修日蓮聖人遺文全集〕上卷、七二二—七二四頁

⑨ 宝地房証真『法華玄義私記』卷第三末

伏膺頂戴者。輔云嘉祥棹字海。心包難伏心恵。口瀉如流之辯著述章疏。領徒盛化。乃至乃捨山水納一領用奉大師。遂即伏膺請講法華。身為肉磴用登高座。後因借章安義記弥淺深。投足天台。演稟法華。誓願弘讚頂戴永永〔已上略抄〕。彼請書等具載百録。（日仏全書二一・四八三上、カッコ内は割注）

この中、資料①の円珍『法華論記』では、すでに「仏祖統紀」以前に吉蔵が「旧章を焼却して天台に帰依」したことが伝えられていて注目されるほか、⑩日蓮『秀句十勝鈔』、⑪宝地房証真『法華玄義私記』では道暹の『法華文句輔正記』が引用されていることが注意される¹³⁾。いずれにしてもこれらの記述の基底にあるのが『国清百録』であることは疑いのない事実であり、その記述が見事に増幅されている過程が理解されるであろう。平井博士はこうした増幅した「誣言」がなされる背景にこそ『法華文句』の吉蔵疏依用とその成立に關する秘められた真実があるとし、『法華文句』の成立に關する研究¹⁴⁾では「日嚴寺の諍論」に絡めてさらに踏み込んだ記述を展開されている。

こうした『国清百録』や『仏祖統紀』等の記事をめぐると読み方に対する積極的議論を私は算聞にして知らないが、今後この問題を考えるにあたっては避けては通れない重要な点であることは疑いあるまい。

(四)

さて、『法華文句の成立に関する研究』については、私の知る限り次のような書評や論文において論評がなされている。

- ① 池田魯參「書評」『法華文句の成立に関する研究』（『駒澤大學仏教学部論集』第一六号、一九八五年一〇月）
- ② 近藤良一「書評」平井俊榮著『法華文句の成立に関する研究』（『印度哲学仏教学』第二号、一九八七年一〇月）
- ③ 菅野博士「中国における法華経疏の研究について」（『創価大学人文論集』第六号、一九九四年三月）

- ④ 菅野博士「日本における中国法華経疏の研究について」（一九九九年十二月七日付けの『中外日報』に掲載、菅野博士「天台大師智顛と嘉祥大師吉藏の法華経観の比較研究（平成一〇年度～一二年度科学研究費補助金研究成果報告書）」に再録）

この中、書評③の冒頭において池田教授はまず、

本書を通読して、率直なところ、あの望月信享著『大乘起信論之研究』（大正一一年金尾文淵堂刊）の研究に匹敵するような、最近にはない話題性のある学術書ではないか、と最初に感じた。『法華文句』の虚構性を解体していく、方法論的な確かさ、論証の緻密さにおいてあるいは『大乘起信論之研究』を凌駕するかも知れないと思ってみたりもした。それは例えば津田左右吉の「記紀の研究」にも似た稠密な文章の感触である。

と述べ、本書に対して最大限の賛辞を呈している。しかし、池田教授によるこの書評③は書評というよりはむしろ該書の要文を抄略して示したもので、本書の内容を手早く知るにはなほだ便利なものであるが、教授自身の本書に対する論評は意外と少なく末尾に次の

ような記述が認められるだけである。

最後に、本書を通読して感じた私見を二、三記すと、先ず、吉藏の註疏の影響を叫ぶあまり、灌頂の存在を不当に軽視しているのではなからうか、と感じた。ことに「日嚴諍論」の敗残と反撃というような動機で、吉藏と灌頂の関係を位置づける仕方は、いささか穏当を欠くのではなからうか。その中で『国清百録』などの資料や、灌頂が記録した文をすべて捏造であるのかのように判ずる態度は私には賛成できない。この辺の問題はなお保留にしておきたい。六割方は正しい真実かも知れぬが、それをもって十割そうであるかのように記し、それだけのものではないように判ずる文章の調子に、しばしば空しさを感じるのは私だけではないと思う。（中略）このような観点からみると、『文句』の成立を、あたかも吉藏教学に対する「誣言」というような面でのみおさえる解読法には多に反省の要があると感じた。同ような傾向は、証真教学を評価するあまり湛然教学を軽視しているという点である。（以下略）

ごく短い記述ではあるが、おそらくこれが池田教授の本音なのであろう。池田教授はのちに⑤「湛然の三大部注書にみる三論教学」（平井俊榮監修『三論教学の研究』春秋社、一九九〇年に所収）という論文を著わし湛然の学的正当性を強調しているので参照されたい。¹⁶⁾

菅野博士博士の④⑤は我が国における法華研究史を概略的にまとめたもので、その中の一つとして本書も論及されている。したがって、それらは当然のことながら本書だけを取り上げた専一の論文ではなく、紙幅も十分とはいえないものであるが、その内容紹介はよ

くまとまったすぐれたものとなっている。特に④の研究報告書「はしがき」にある、

智顛の『法華玄義』、『法華文句』の一部が吉藏の『法華玄論』、『法華義疏』を参照して成立したという平井氏の研究は文献学的に正しい指摘であり、これについては誰も異論を差し挟むことはできない。平井氏の研究は、日本において『法華経』研究の分野で圧倒的な権威と認められてきた智顛の影で、不当にも冷遇されてきた吉藏の復権を果たすものであり、いわば日本における天台研究に覚醒の鐘を打ち鳴らすものであった。(傍線部分奥野)

という一文は、平井博士の本書執筆の目的を的確に捉えた記述であったと評せるであろう。

さて、本書は「天台と三論の文献交渉」という大きな問題を扱った衝動的な著書であったわりには、学界の反応はいま一つでめぼしい反論もなされていないというのが実際のところである。(18) 刊行直後に著わされた反論に類する論文としては、管見の限りではわずかに次の論文を知るだけである。

① 浅井圓道「法華文句の有する獨創性」(野村耀昌博士古稀記念『仏教史・仏教学論集』春秋社、一九八七年に所収)

② 多田孝文「法華文句四種釈考」(『大正大学研究紀要』〔仏教学部・文学部〕第七二輯、一九八六年十月)

まず論文①で浅井博士は、

最近、天台宗やその他の研究家の幾人かが日蓮宗教学研究発表大会や日本印度学仏教学会などにおいて、最もひどい意見としては智顛(五三八—五九七)述の法華文句のほとんど三分の二ほ

どが吉藏(五四九—六三三)の法華玄論や法華義疏の文言から盗用であるとして(得々として)論じるのに出遭う。

とし、さらに、

しかし、それらの見解が見識な世界に曲流してゆくことに日蓮宗門内でもそれを常識として天台三大部の成立を眺めるようなことになった場合、日蓮教学の基礎たる天台学について軽蔑を生じる原因になりはしないか。吾人は甚だ危惧を感じてこの小論を世に問う次第である。

と述べて、この論考を発表された心情を吐露しておられるが、これは日蓮教学研究所所長というお立場にあった浅井博士としては当然のことであったといえよう。

ただ、浅井博士のこの論文は、平井書の個々の文脈について逐一反論を展開したというものではなく、『文句』が吉藏の法華疏を参照したのは「旧解の紹介部分、諸経論の引用部分、特殊な問答の部分に限られており、天台学の骨子には全く関係がないようである」として、「付屬論」「化道の始終」「一念三千」の三つの項目にわたって思想的に見た場合、吉藏疏が天台疏に及ばない例証とされているだけである。したがって、文脈に即した積極的反論がなされていないところに難点があるといわざるを得ず、やはり護教的との批判は免れ得ないであろう。(20)

次の多田孝文氏の論文②も平井博士がその関連性を探ろうとした『法華文句』に説かれる「四種釈」と吉藏の「四種釈義」について(21)、その説を念頭におきつつもそれについて積極的反論を試みたものとはいえないものであり、むしろ智顛の經典解釈法に示された一大特徴でもある「因縁」「約教」「本迹」「観心」の四種釈について多田氏

が智顛以前の中國仏教思想を俯瞰して四種釈の源流というべきものを探りつつ、解説をなした論考というべき性格のものである。したがって、これも積極的な反論がなされていない点が惜しまれるところである⁽²²⁾。

こうした中であつて、平井博士の提起された問題を正面から真摯に受け止め、関連する多くの論考を発表されているのが藤井教公氏である。すなわち、藤井氏には次のような一連の論文がある。

⑥ 藤井教公「天台と仏教の三論の交流―灌頂の『法華玄義』修治と吉藏『法華玄論』をめぐって―」(鎌田茂雄博士還暦記念論集『中国の仏教と文化』大藏出版、一九八八年)

⑦ 同「天台と三論の交渉―智顛説・灌頂録『金光明經文句』と吉藏撰『金光明經疏』との比較を通じて―」(『印度学仏教学研究』第三七卷第二号、一九八九年三月)

⑧ 同「天台と三論―その異質性と類似性―」(『印度哲学仏教学』第一五号、二〇〇〇年十月)

⑨ 同「中国隋唐仏教における衆生観―天台・三論を中心に―」(『印度学仏教学研究』第五一卷第二号、二〇〇三年三月)

まず藤井氏は論文⑥において平井博士が問題にされた『法華玄義』と吉藏の『法華玄論』の依用関係について再検討し、『玄義』中の『玄論』の引用・援用の性格は大きく次の二類に分けられることを指摘する。

(一) 異解として採り入れ、引用として示しているもの。
(二) 地の文として採りこんで、自説としているもの。

しかもその引用・援用は(一)類の場合が圧倒的であり、それも異解として批判の対象としている用例がほとんどであつて、そこから

灌頂の『法華玄義』修治の実態が見えてくるとし、さらに次のように述べる。

すなわち、異解異説をできるだけ多く引用し、批判を加える必要のないものについてはこれをそのまま出だし、自説と内容上対立あるいは矛盾するものにはこれに批判を加えて自説をより明瞭化するという方向である。この方向に沿って、従来の諸師の異説を多く採りこんで「出経論」段や「引旧解」段を組織し、諸経論を多く引いてきて「出経論」段を著わして、これらを盛りこむことによつて『玄義』全体の構成の整合性を保つべく『玄義』を再組織したのが灌頂の『玄義』の修治の実態であつたと想像される。つまり、『玄義』修治の第一の目的は、異解異説を多く採り入れて、博引傍証化することであつたと考えられるのである。(傍線部Ⅱ奥野)

藤井氏はこうした「異解異説を多く採り入れて、博引傍証化する」傾向を藤村晃博士の「異説包容主義」という言葉に示唆を受けて「博」と呼び、こうした「博」の傾向を帯びた注釈書の作成が当時の一般的风潮であつたことを指摘している⁽²³⁾。そしてそうした特徴を持つ代表的注釈書の一つが、淨影寺慧遠(五三三―五九二)の『勝鬘寶記』の説を何の断りもなく地の文に取り込みつつ著わされた吉藏の『勝鬘宝窟』であるとし、今日的視点からすれば「盗作」や「剽窃」との譏りを免れないこうした製疏の仕方でも当時は広く行われていた一般的な手法であつたと主張する。すなわち、藤井氏のいわんとするところは、灌頂によつてなされた吉藏の『法華玄論』を引用・援用しての『法華文句』や『法華玄義』の修治が「盗作」や「剽窃」にあたるなら、それは吉藏の『勝鬘宝窟』の場合も同様であつて、「盗作」

や「剽窃」といった今日的基準をもってしては当時の製疏状況を裁断することはできないというものであろう。私見によれば、これは一理のある議論であり、よくよく検討してみなければならぬ問題であると思われる。

また、藤井氏は上述のように灌頂の修治の際の基本的提提を確認した上で、智顛の『法華玄義』講説の原型を模索、推論している。このように藤井氏の灌頂の『法華玄義』修治に関する分析には傾聴に値する意見が多く、その意味でこの論文^(h)は是非とも参照しておくべきものといえる。

論文⁽ⁱ⁾は、平井博士が古藏疏から智顛疏へという影響関係が明らかであるとされながらも、『法華文句の成立に関する研究』では論及されなかった両者の『金光明経』の注釈書について藤井氏が検討を加えたものである。まず藤井氏は、智顛疏・古藏疏ともに曇無讖訳『金光明経』に対する注釈書でありながら、いずれも随処で今日には伝わらない真諦訳『金光明経』について言及していることを指摘し、また確かに両疏には似通った文脈が見られることを報告している。そして両疏にこうした似通った文脈が存在するのは、両疏には「真諦疏」という共通して先行する注釈書が存在したからであり、これが共通するソースとなって両者がこれを引用・援用しているからであると述べる。ただし、その引用・援用の仕方を見ると、智顛疏が「真諦云」として出典を明示し批判的に論及することが多いのに対し、古藏疏では一切その名を明かさず真諦説をそのまま自説として取り込んでいる等の違いが見られ、両者の解釈はかなり違ったものになっているとして、次のように結論している。

以上のことから推して、天台と三論古藏における文献交渉は、

『金光明経』の注釈書類に関するかぎり、両者の間に存在しないといってもよいであろう。それは、これまでに指摘されている『法華文句』や『維摩経疏』などの一連の灌頂修治の著作とは大いに異なるものである。

これは「現存する智顛と古藏に共通する經典註疏間の相互の依用関係は、ほとんど例外なく古藏疏から智顛疏へという参照依用の跡が顕著に見られ、その逆は全く見られないことが判明したのである」とする平井説に異を唱えたものとして注目される。

ところで、古藏の『金光明経疏』に対しては、近時その偽撰説も主張されているほどであるから、そうした点の検討も含めこの問題はさらに再検討すべき余地を残しているというのが現状というところである。

以上のように藤井氏は論文^(h)において、平井説に対して批判的見解を述べているのであるが、しかしだからといって氏は平井博士の説すべてに異を唱えているわけではけつてない⁽²⁵⁾。氏の関心のありかは平井博士の明かされた「天台と三論の文献交渉」という事実を踏まえ、それを検証しつつ、「天台と三論」の思想的差異を説明するところにあるのであり、そうした関心の一端を示した研究が論文⁽ⁱ⁾なのである。そしてこうした問題意識は菅野博士にも強く認めことができ、菅野博士はすでにふれた報告論文^(d)の「はしがき」において、次のように述べている。

しかし、『法華玄義』、『法華文句』の一部が古藏の法華経疏を参照して成立したという平井氏の研究を認めても、陳・隋代における智顛の『法華経』解釈が高い評価を受け、古藏自身もそのような名声のある智顛の存在を十分に意識していた歴史的事実

を考えると、智顛の法華經觀を無価値なものと思ふことも誤っていると考へられる。むしろ、現在の研究課題は、智顛と吉藏の法華經觀の重要な相違はどこにあるのかという、両者の思想的な内実の研究である。従来の研究は、両者の法華經疏の記述の細々とした参照関係の指摘にとどまり、両者の法華經觀の全体像を大局に立って比較するという態度に欠けていたし、そのような成果もほとんど皆無の状態であつたと思う。

かかる菅野博士のご意見は今後われわれが共有すべき重要な提言といえる。平井博士のなされた画期的研究である『法華文句の成立に関する研究』刊行二十年目に、いるわれわれは同書を踏まえつつ、藤井氏や菅野博士の指向するような問題意識に立つた新しい研究をなすべき時にいたつたといえよう。しかし、それは言う易く行なうは難い大きな問題であることもまた事実である。一人の力には限界があるので、いまこそかつて本学で活発に行われていたような共同研究が必要な時なのかもしれない。

その他、述べ残したことも若干あるが、ひとまずここで擱筆することを諒とされたい。なお、私が確認している限りの関連論文を本稿末尾に「付録」として掲載したので参照していただければ幸いである。

註

(1) 『法華文句の成立に関する研究』の概要を「目次」によつて示せば、以下の通りである。

第一篇 序論 智顛と吉藏— 經典註疏をめぐる諸問題—

第一章 智顛の經典註疏と吉藏註疏

天台と三論（奥野）

第二章 維摩經註疏をめぐる諸問題

第三章 『法華玄義』と『法華玄論』

第一篇 法華文句の成立と伝承に関する批判

第一章 『法華文句』の成立

第二章 『法華文句』のテキスト

第三章 經の科文に関する問題

第四章 『文句』の四種釈と吉藏四種釈義

第五章 『文句』と『玄論』の引用文献

第六章 証真『法華疏私記』の吉藏闕説

第三篇 法華文句における吉藏註疏の引用

第一部 『法華文句』と『法華玄論』

第二部 『法華文句』と『法華義疏』

なお、本書の梗概を知るには本稿の後文においても紹介する池田魯參教授の「書評」と菅野博士博士による内容要約が便利である。池田魯參「書評」『法華文句の成立に関する研究』(『駒澤大学仏教学部論集』第二十六号、一九八五年一〇月)および菅野博士「中国における法華經疏の研究について」(『創価大学人文論集』第六号、一九九四年三月)参照。

(2) 横超慧日「慧遠と吉藏」(『中国仏教の研究第三』法蔵館、一九七九年に所収。初出は結城教授頌寿記念『仏教思想史論集』大蔵出版、一九六四年。以下本文の引用は前著による)。

(3) 前注(2) 横超書一四六頁。

(4) 平井博士は『法華文句の成立に関する研究』「はしがき」において、「智顛と吉藏という隋代を代表する二人の祖師について、対照的な両者の性格や立場からは考へられない、六種類

もの共通の經典註疏の存在は一体如何なる意味があるのか、両者の註疏間には相互に如何なる関係があるのか、これを厳密な両者註疏の本文の比較対照によって精査してみようと志したのが、本研究の端緒であった」と述べておられる。

- (5) 佐藤哲英『天台大師の研究』（百華苑、一九六一年）参照。この書は智顛の著作全般にわたる文献批判をなした画期的研究であるが、平井博士はなお依然として護教的な立場を脱却し切れていないとしてその不備を指摘している。

- (6) 前注(1)に示した「目次」に明らかなように『法華文句の成立に関する研究』では、『金光明経』と『観無量寿経』に対する注釈書の具体的依用関係の論述は省略されている。

- (7) 池田魯参『国清百録の研究』（大蔵出版、一九八二年）「あとがき」参照。この「あとがき」と同書に寄せられた鎌田茂雄博士の「序」によれば、この自主ゼミの遠因は昭和四十四年度開講の本学大学院における鎌田博士の「演習」であったようである。

- (8) 平井俊榮「吉蔵と智顛―經典註疏をめぐる諸問題―」（『東洋学術研究』第二〇巻第一号、一九八一年四月）。この論文はのちに『法華文句の成立に関する研究』の第一篇第一章に受け継がれることになるが、同書では『国清百録』の読み方に対する詳細な記述は省略されているので、そうした意味では重要な意義を持つ論文といえる。なお、平井書における関連する記述としては、二八八―二八九頁参照。

- (9) 前注(8) 平井論文一〇九頁参照。
 (10) 同じく前注(8) 平井論文一一〇頁参照。

- (11) 島地大等『天台教学史』第二篇第四章第一節「智顛と吉蔵との関係」（明治書院、一九二九年初版。隆文館、一九七七年復刊、二六六―二六七頁。引用頁数は後者の復刊本による）。なお、この島地博士の研究については、本稿に「付録」として掲載した論文中、河村孝照博士の次の論文においても注意されているので参照されたい。河村孝照「章安の涅槃経観」とくに涅槃経玄義において」（『東洋学研究』第一九号、一九八五年三月）

- (12) 前注(8)の論文において平井博士は『仏祖統紀』における増幅を次のように要約している（二一〇―二一一頁）。

①『統伝』の「灌頂伝」では、「講を廢し、衆を散じて、足を投じた」のは天台智顛に対してであったが、ここでは（Ⅱ『仏祖統紀』）明らかに灌頂その人に対してであり、また「深く前作の妄を悔いた」というのも、前者（Ⅱ『統伝』の「灌頂伝」）にはないことである。

- ②（『仏祖統紀』が）『統伝』の「灌頂伝」と微妙に違うところは、吉蔵が灌頂から借り求めた「義記」『法華疏』が、ここでは『法華玄義』のようにきわめて具体的になっていること。また、借覧の時期が、前者では智顛の生前であったのに対し、ここでは『国清百録』のいう禅衆百余人と智顛に講説を請うた後、つまり、智顛の死後になっていることである。また、同じ『仏祖統紀』の「灌頂伝」にもなかった「旧疏を焚棄した」という新たな材料を付け加えている点である。

- (13) 平井博士が『法華文句』と吉蔵の法華疏の本文対照をなすにあたって最大の指南としたのが宝地房証眞の『法華疏私記』

であったことは博士自らが明らかにされているところであるが、証真が平井博士がなされたような「文句」の著者性までを含む踏み込んだ文献批判はなし得なかったのではないかということについては、拙稿「吉蔵と宝地房証真」(『印度学仏教学研究』第四三卷第一号、一九九四年二月)を参照していただきたい。

- (14) 『法華文句の成立に関する研究』第一篇第二章第三節「維摩經疏」と三論師」六四―七一頁参照。なお、この「日嚴證論」をめぐるのはごく最近、黄瑜美氏により反論が提示されたが(『大般涅槃經玄義』の縁起分をめぐる「日嚴爭論」について)『印度学仏教学研究』第五三卷第二号、二〇〇五年三月)、問題も多いようである。

- (15) 『国清百録』の記事を捏造と見る平井博士の説に対しては、池田魯参教授、大野栄人博士が疑義を表明しているが具体的反論は提示されていない。前注(1)池田魯参「書評」『法華文句の成立に関する研究』(『駒澤大学仏教学部論集』第一六号、一九八五年一〇月)および大野栄人「天台文献にみられる吉蔵以前の三論教学」(平井俊榮監修『三論教学の研究』春秋社、一九九〇年に所収。同書三四―三四二頁。なお、この論文はのちに大野博士の『天台止観成立史の研究』法蔵館、一九九四年に再録された)参照。

(16) 池田教授はこの論文の結論として、「ともあれ、湛然において、吉蔵の「論の宗」に対する、天台の「経の宗」の優位性は不動である。『起信論』などの新しい論は勿論のこと、三論や『法華論』などの根本の論の教説でも、その理解に際して

天台と三論(奥野)

は是々非々の態度で望むのが天台学の伝統であるが、そのような批判的な研究態度が湛然によって正しく継承され、どこまでも『妙法蓮華經』の本文の経意を掘り下げようとする天台学の教観相資の綱格は、湛然によって充分に發揮されたことを再確認するのである」(三三六―三三六四頁)と述べている。

- (17) 菅野博士がいわゆる「不当にも冷遇されてきた吉蔵の復権」がおそらくは平井博士が本書を執筆された最大の動機ではなかったのかと私は思う。ために本書の中にはやや強引に過ぎる記述やいくぶん過激とも思える記述が散見され、それが後注(19)に紹介する浅井圓道博士のように「不愉快」さを感じさせる原因にもなっていると予想されるが、しかしそこには平井博士の周到な計算があったのだと私には想像される。つまり、そこまで過激に主張しなければ容易に吉蔵の「復権」は果たし得なかったということであり、裏を返せばそれだけ天台学の影響が圧倒的だったということである。私は本書に見られる平井博士の戦略的論述をそのように理解している。

- (18) 逆の見方をすれば、めばしい反論が見られないということはそれだけ本書の完成度が高いということをも意味しよう。

(19) 浅井博士は平井書を評して、「氏は三論の研究者であるらしく、吉蔵を立場として灌頂の製疏を批判する形式をとっており、そのために灌頂に対して不愉快とさえ思えるような言辞を吐かれることもあるが、しかし灌頂が智顛講述を製疏してゆくときのどの辺で吉蔵を参照したかを秤にかけられることを、

時には怠り、時には吉藏参照箇所の重大性を強弁する嫌いがあのように思える。それはともかく、吉藏参照部分を細大もらさず拾い出された点において、吾人にとっては大変参考になつた」ともいつている。

- (20) 浅井博士は吉藏、智顛、光宅寺法雲の法華解釈を次のように論評している。「要するに、法雲は分段することに血道を挙げ、詮議は至つて少ない。その分科の繁雑さ、他品の分科との関連の考察がない等については、法華文句が事毎に指摘したところである。吉藏は經文所出の要句の解説が多く、また諸文献を必要に応じてよく渉獵し、さらにはその識見は法雲を引き離して天台に近いところも多く、灌頂がよつて以て参考に供した心情もわかる。そこに吉藏の註釈の特徴があるが、しかし法華經の各種の教説に名目を与え、法門として活性化した点では、天台に及ばないところがあると思う」（傍線部、筆者＝奥野）

- (21) 平井博士は本書第二篇第四章として「文句」四種釈と吉藏四種釈義なる一章を設け、「法華文句」に見られる有名な「因縁」「約教」「本迹」「観心」の四種釈を「經典解釈法としての何らの普遍性も妥当性も持ち合わせていない」（三三九頁）と判じ、「文句」が吉藏の「玄論」や「義疏」を下敷きにして、これに全面的に依拠しているという事実を前提にするならば、「文句」の著者は、吉藏の教学に熟知していた形跡がある。とすれば、吉藏の説く「四種釈」と「文句」の説く「四種釈」とは、全く無関係ではあり得ないということも予測される」（二四〇頁）述べて、その関連性を追究している。

- (22) 但し、平井博士の論述もすでに本稿本文でも述べたように「法華文句」と吉藏の法華疏の全体的依用関係から見た場合、帰納的に敷衍して考えてみれば「文句」の四種釈は吉藏の四種釈義の影響を受けたものではなかったかと示唆するものであつて、その影響関係を決定的に論証したものではない。それは平井博士自身が「ただし、『文句』の四種釈が吉藏の四種釈の概念を借りて、これを換骨奪胎し、全く異つた用法のもとに用いたのである」という確たる証拠はない」（二四七頁）と述べられていることからも明らかであると思う。したがつて、両者の目指した内実に関わる詳しい比較研究はこれからというのが実際のところであろう。

- (23) 袴谷憲昭教授は、こうした「異説包容主義」「博」という性格をもつて当時の製疏の状況を説明しようとする藤井氏の見解を批判する（袴谷憲昭『本覚思想批判』「序論、本覚思想批判の意義」大蔵出版、一九八九年、一七一―一九頁参照）。智顛の思想を高く評価する袴谷教授は、天台の著作から灌頂が吉藏疏から付加した部分を取り除けば、そこに眞の仏者としての智顛の姿が浮かび上がつてくると見ておられるように思われるが、ことはそれほど簡単ではないであらう。

- (24) 吉藏の「勝鬘宝窟」と慧遠「勝鬘義記」との依用の関係については、藤井氏の次の論文を参照のこと。藤井教公「淨影寺慧遠撰『勝鬘義記』卷下と吉藏『勝鬘宝窟』との比較対照」（常葉学園浜松大学研究論集）第二号、一九九〇年三月）参照。また近時、吉津宜英博士も「勝鬘宝窟」における「起信論」の引用箇所は概ね「勝鬘義記」のそれを無断で孫引しているこ

とを論証されている(吉津宜英「古蔵の大乗起信論引用について」『印度学仏教学研究』第五〇巻第一号、二〇〇一年十二月を参照)。

- (25) 藤井氏とは別に菅野博士も古蔵の『維摩経義疏』が何の断りもなく無断で『注維摩詰経』を引用・援用していることを指摘し、こうした製疏のあり方が当時の一般的手法であったことを主張している(菅野博士「日本における中国法華経疏の研究について」一九九九年十二月七日付けの『中外日報』に掲載、菅野博士「天台大師智顛と嘉祥大師古蔵の法華経観の比較研究(平成一〇年度～一二年度科学研究費補助金研究成果報告書)」に再録を参照)。

- (26) 『法華文句の成立に関する研究』「はしがき」i—ii頁参照。
(27) 林鳴宇「宋代天台教学の研究—『金光明経』の研究史を中心として」第二篇第二章第三節「古蔵の『金光明経疏』」(山喜房仏書林、二〇〇三年)を参照。なお、林氏の古蔵「金光明経疏」偽撰説に対して、私は拙稿「古蔵撰『金光明経疏』をめぐる諸問題」(駒澤短期大学研究紀要)第三十二号、二〇〇四年三月)を投じて疑義を呈した。参照していただければ幸いである。

(28) 例えば、藤井氏が天台の著作における世親の『法華経論』の引用を精査されて、「智顛在世時代に灌頂の聴記本や修治本が存在していたと考えられる『法華玄義』や『摩訶止観』、智顛が晋王廣のために著した『維摩経疏』などにはその引用が少なく、智顛没後最も遅く成立した『法華文句』になぜ論の引用がもっとも多いのかという疑問がなお残る。引用状況だけ

天台と三論(奥野)

からの憶測は危険であるが、右の状況からすると、『法華経論』は智顛の与り知らぬところで、灌頂の手によって古蔵の疏を指南にしながら引用されたのではないかという疑念をどうしても拭い去ることができないのである。もしそうであれば、天台における『法華経論』の重視は智顛ではなく灌頂より始まるということになる」(天台智顛の『法華経』解釈—如来蔵仏性思想の視点から—勝呂信静編『法華経の思想と展開』平楽寺書店、二〇〇一年、三五九頁参照。傍線部〓奥野)と述べる例などは平井博士の研究を踏まえ、さらに一歩進めた見解であるといえよう。

- (29) 今年度の第五十六回日本印度学仏教学会学術大会のプログラムによれば、菅野博士は『法華文句』における注釈の諸問題」と題する発表をなされることになっている。おそらくは如上のような問題意識に立ったご発表であると期待される。また私見によれば、本稿末尾に「付録」として掲載した諸論文、花野充道氏の一連の研究も智顛と古蔵の思想的差異ということを意識した論文であると判断されるものであり、注目すべき研究となっている。(二〇〇五年七月十日)

【付録】

*以下に本稿で触れ得なかつた関連する諸論文を列記しておきたい(五十音順)

- ① 粟谷良道「古蔵撰『仁王経疏』における問題」(『印度学仏教学研究』第二九巻第一号、一九八〇年二月)
- ② 同「古蔵撰『金剛経義疏』における問題」(『印度学仏教学研究』

- 第三〇卷第一号、一九八二年三月）
- ③ 同「天台三諦説と吉蔵二諦説」（『印度学仏教学研究』第三二卷第一号、一九八二年二月）
- ④ 同「天台における仮の思想―吉蔵との比較」（『印度学仏教学研究』第三二卷第二号、一九八四年三月）
- ⑤ 秋葉光寂「法華玄義―釈名章と吉蔵の法華経疏経題釈の比較―因果論を中心に」（『天台学报』第四四号、二〇〇二年十一月）
- ⑥ 同「法雲、智顛、吉蔵の因果観」（『天台学报』第四五号、二〇〇三年十一月）
- ⑦ 同「智顛、吉蔵の権実二智論」（『天台学报』第四六号、二〇〇四年十一月）
- ⑧ 柏倉明裕「灌頂と吉蔵―『法華文句』にみられる吉蔵の引用文について―」（『印度学仏教学研究』第四二卷第一号、一九九三年二月）
- ⑨ 同「『法華玄義』に於ける天台教学と『法華玄論』―教相判釈を中心にして―」（『印度学仏教学研究』第四三卷第一号、一九九四年二月）
- ⑩ 同「智顛と吉蔵の二諦義の一断面」（『印度学仏教学研究』第四四卷第一号、一九九五年二月）
- ⑪ 河村孝照「章安の涅槃経観―とくに涅槃経玄義において―」（『東洋学研究』第一九号、一九八五年三月）
- ⑫ 同「灌頂撰『涅槃経玄義』における「有る人」とは誰れを指すか」（『印度学仏教学研究』第三四卷第一号、一九八五年二月）
- ⑬ 末光愛正「吉蔵経典観の背景―天台五時説との類似」（『印度学仏教学研究』第二九卷第一号、一九八〇年二月）
- ⑭ 同「吉蔵の頓漸説と三車四車説―天台の頓漸説との類似」（『印度学仏教学研究』第三〇卷第一号、一九八一年二月）
- ⑮ 同「天台五時教判と三論教学」（平井俊榮監修『三論教学の研究』春秋社、一九九〇年に所収）
- ⑯ 同「天台五時教判と三論教学（二）」（『駒澤大学仏教学部論集』第三三号、一九九二年十月）
- ⑰ 花野充道「智顛と吉蔵の法華仏身論の対比」（『天台学报』第四二号、二〇〇〇年十一月）
- ⑱ 同「智顛の仏身論の素材の検討―『法華文句』の文献的価値について―」（『印度哲学仏教学』第一四号、一九九九年十月）
- ⑲ 同「智顛における仏身論の考察」（天台大師千四百年遠忌記念『天台大師研究』一九九七年に所収）
- ⑳ 村中祐生「隋末唐初の三論・天台兩門流」（『印度学仏教学研究』第十卷第二号、一九六二年三月）
- 同「章安尊者と嘉祥大師（序説）」（『天台学报』第八号、一九六七年一月）
- 若杉見龍「智顛と吉蔵―五百由旬の解釈をめぐって―」（『印度学仏教学研究』第二九卷第二号、一九八二年三月）

【追記】

注（29）に記した今年度の日本印度学仏教学会学術大会における菅野博士のご発表は、『法華文句』における四種釈について」と改題されて七月二十八日に予定通りに行われた。私は今年度は同学会には参加しなかつたため残念ながら菅野博士のご発表を直接お聞きする機会を失してしまつたが、駒澤大学

大学院修士課程の渡邊幸江氏のご好意により博士の発表資料を入手することができた。それによれば、菅野博士は本稿でも触れた平井博士の『法華文句』に説かれる「四種釈」と吉蔵の「四種釈義」の関係に対する論究を批判しつつ、「文句」「四種釈」の特色について吉蔵法華疏を含めた新たな視点から論じておられる。菅野博士の発表資料を届けて下さった渡邊氏には厚く御礼申し上げます。

(二〇〇五年八月二十日、記)

